

彙 報

会 長 小 泉 保

平成2年度第2回常任委員会

日 時：平成2年9月8日（土）午後2時～5時

場 所：三省堂大阪支社

出席者：小泉 保（会長）、影山太郎、佐藤昭裕、松本克己、藪 司郎（以上、常任委員）、近藤達夫（常任委員、事務局長）、崎山 理（常任委員、第101回大会運営委員長）、長野泰彦（第101回大会事務担当、国立民族学博物館）。

議事ならびに報告：

（1）第101回大会について。

1. 研究発表者の選定。
2. プログラムの決定。
3. 第101回大会を国立民族学博物館との共催のかたちで行なうにつき、同博物館のホール使用に特別の経費がかかり、通常の大大会運営費を超過することが予想されるので配慮してほしいとの申し入れが、同大会運営委員長よりなされた。この件については、事務局が柔軟に対応していくこととした。
4. その他。

（2）第102回大会について。

（3）文部省科学研究費審査委員候補者の選出結果について。

（4）役員改選の日程について。8月20日開催の選挙管理委員会で検討された次期役員の選挙の日程について報告があった。

（5）予稿集作成の提案について。委員荻野綱男氏からの大会予稿集作成の提案（別掲本巻162ページ参照）について、審議した結果、次のような

意見が出た。

1. 予稿集作成だけのための委員会を作る必要があるのではないか。編集委員会はやはり性格が別である。
2. 予稿集に掲載の短かいもので、研究発表の場で十分事足りるか。ハンドアウトも別に配布する必要があるろう。
3. 一人最少6ページとして（研究発表が仮に3室24人とすると）約150ページのものになる。かなりぶあつく、コストもかかるだろう。
4. 予稿集を発行している他学会は、その多くが、年に一回しか大会を開催していない。

(6) その他。

1. 文部省「言語学用語集」について。専門委員会委員長松本克己氏より中間報告があった。
2. 会長より、本常任委員会が、今期役員の下での最後の常任委員会となることに鑑み、常任委員諸氏に対して、この3年間の協力に対し謝辞が述べられた。

平成2年度第2回委員会

日 時：平成2年10月13日(土) 午前10時～12時

場 所：国立民族学博物館

出席者：小泉 保（会長）、井出祥子、大東百合子、荻野綱男、鏡味明克、笈寿雄、影山太郎、菊地康人、近藤遼夫、阪倉篤義、佐藤昭裕、柴田武、柴谷方良、清水克正、下宮忠雄、庄垣内正弘、崎山 理、杉藤美代子、竹内和夫、田中克彦、田村すず子、土田 滋、徳川宗賢、長嶋善郎、林 栄一、原口庄輔、樋口康一、松本克己、薮 司郎（以上、29名）。

委任状：23名。

議事ならびに報告：

(1) 第101回大会について。

1. プログラムの概要について会長より説明がなされた。

2. 大会運営委員長崎山 理氏が、会場その他について説明した。
 3. 本大会を国立民族学博物館との共催のかたちで行なうことに伴う特別経費については事務局が柔軟に対応していくことが決定された（上記常任委員会議事ならびに報告（1）3. 参照）。
- （2）第102回大会について。平成3年6月8日（土）・9日（日）の両日、東京外国語大学（合同大学アジア・アフリカ言語文化研究所）を会場として行なうことが決定された。
- （3）文部省科学研究費審査委員候補者選出のための委員による郵送投票の結果について。会長・選挙管理委員長より次の報告がなされた。
1. 7月25日投票用紙発送，8月13日投票締切，8月20日選挙管理委員会にて開票，の日程で投票を行なったこと。
 2. 開票のための選挙管理委員会は，会長が訪欧中であったため，選挙管理委員徳川宗賢氏を，選挙管理委員長代行に委嘱して，以下の通り行なったこと。
- 平成2年度第2回選挙管理委員会
- 日 時：8月20日午後3時～5時
- 場 所：三省堂大阪支社
- 出席者：徳川宗賢（委員長代行），影山太郎，近藤達夫，崎山 理，佐藤昭裕，庄垣内正弘，杉藤美代子。
- オブザーバー… 藪 司郎（常任委員）。
3. 開票結果は以下の通り。

第2段審査委員候補者：土田 滋，小泉 保。次点 風間喜代三。

第1段審査委員候補者：松本克己，梅田博之，田村すず子，柴谷方良。次点 長谷川欣佑。
 4. 選挙結果に基づき，学術会議に推薦した。
- （4）役員改選の日程について。上記選挙管理委員会で打合わせた次期役員選挙の日程について会長・選挙管理委員長より説明があり，承認された。なお，この日程は，年末から年始にかけて行なわれる日本学術会議会員候補者，および同推薦人等の選出のための委員による郵送投票の日程に

合わせて決定される部分を含むこととした。

(5) 予稿集作成の提案について。委員荻野綱男氏からの提案（別掲本巻162ページ参照）について、他学会の状況、常任委員会で出た意見、などを踏まえて、審議した結果、次のような意見が出たが、今後の検討事項として、次期役員に引き継ぐこととした。

1. 口頭発表はあまり形式ばらないかたちで、あまり固まっていないようなものでも行なえるようなものである方が望ましい。従って、予稿集は必ずしも必要でない。「言語研究」への投稿と、口頭発表は、おのずから性格が異なる。
2. 反対である。従来のみままでよい。
3. やってやれないことはないが、費用、労力、時間、会員数の多い学会／少ない学会、大会での販売、事前配布、購入者の実数の予測、大会当日のハンドアウトの必要性／不必要性など、さまざまな問題があるのも事実である。
4. 予稿集に掲載した原稿を、他の学会誌に掲載することの是非、priority はどうか。
5. 会員諸氏の意見を聞くべきである。

(6) その他。

1. 日本学術会議会員（語学・文学研究連絡委員会委員）柴田 武氏より「大学等における人文・社会科学系の研究基盤の整備について」の経過報告があった。
2. 文部省「言語学用語集」について専門委員会委員長松本克己氏より中間報告がなされた。
3. 財団法人津田塾会主催の日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育の相互活性化」、および日本語専門家会議（いずれも12月1～3日、於津田ホール）の後援団体となることを決定した。
4. 編集委員長下宮忠雄氏より、今期役員の下での3年間の「言語研究」への投稿状況その他について、最終報告があった。
5. 会長より、本委員会が、今期役員の下での最後の委員会になること

に鑑み、委員諸氏に対して、この3年間の協力に対し、謝辞が述べられた。

日本言語学会御中

荻野綱男

1990. 6. 4

前略

大会の研究発表について、言語学会として全部の発表の内容をまとめた発表要旨集を事前に作り、大会の会場でそれを販売することを提案いたします。

なぜならば、現在のシステム（発表者がハンドアウトを自分で用意する方式）には欠陥が多過ぎるからです。

(1) 現在のシステムは、発表者に対して大変な負担になっております。今回の大会では、数百人が集まる発表がありました。そのような大層なハンドアウトを作成するのは時間的・経費的に大変です。これを発表者個人に任せるのはどうでしょうか。

(2) 現在のシステムは、参加者に対しても負担が大きくなっています。ハンドアウトが十分な数量でない場合、ハンドアウトなしではせっかく聞きにいても内容が理解できません。発表者が悪いといってしまうかもしれませんが、学会が相互のコミュニケーションと理解のための場ならば、全部の責任を発表者に押し付けるのは問題です。

(3) 現在のシステムは、開催校に対しても負担が大きいと思います。今回も、発表者の持参したハンドアウトの量が十分でなく、東京大学のほうで追加コピーを相当量作成したようですが、これは大会関係者の側の作業量と経費の増大、および看過しがたい時間のロスを伴います。

(4) 現在のシステムは、同時並行の発表に対して対応できないと考えます。結局はその会場にいないと何がなにやらわかりません。あとから他会場の発表の内容を知ろうにも大変な不便を感じます。

さらに、現在のシステムでは、同時並行で行なわれる発表のどれを聞きに行く

かを事前に判断することができません。タイトルだけでは発表内容の予測がつきません。聞き始めたら、当初の予想と違っていたという場合、他の会場に移動することになりますが、これは大変不便です。

(5) 現在のシステムは、どうしても大会に参加できなかった人に対して、相当不便になっています。あとから『言語研究』誌上に発表内容の要旨が掲載されますが、それだけでは内容がほとんどわかりません。

(6) 関連する他学会では、発表要旨集を作成していますが、このことが、実は言語学会を魅力の少ないものにしてしています。一部の会員から私が聞いたところでは、発表内容が要旨集に残ることで、他学会のほうが「格が上だ」という感じを持つ人がいます。また、自分で大量のハンドアウトを用意するのが大変だからといって、発表を見送った（そして別の学会で発表した）人も知っています。これはすなわち、発表するなら他学会でという考え方であり、言語学会の発表内容の水準低下、発表件数の減少につながると思います。

この件については、発表件数が着実に増大しているのではないかという反論がありそうですが、発表要旨集を作成していたら、もっともっと発表件数は増えていたはずだと申し上げたいと思います。

以上のような、現在のシステムの諸問題を解決する決め手は発表要旨集を作成することです。それによって、上に述べた諸問題は完全にクリアーできます。

では、次に、発表要旨集を作成した場合に考えられるデメリットとそれに対する反論を述べます。

(1) コストの問題

発表要旨集を作成すると、かなりのコストがかかりますが、これは要旨集を参加者に販売することで適切に対応できると考えます。現在は、ワープロの普及という事情がありますから、手書きの原稿でなく、きれいでコンパクトな資料を作成することができる時代です。現に、今回の大会でも多くの（全部の？）発表がワープロによっていました。したがって、以前に比べるならば、コストの問題は大したこともないでしょう。

(2) 作成部数が少な過ぎた場合の問題

これは深刻な問題を生じます。したがって、やや多めに作成するしか方法はありません。

(3) 作成部数が多過ぎた場合の問題

販売するときの定価は、原価よりやや高く設定するべきですが、さらに、次回や次次回に継続して大会の場で販売することも考えられます。残部があれば『言語研究』誌上で「広告」してもいいでしょう。

(4) 作成者の問題

誰が作成するかという問題ですが、大会委員長ないし学会事務局ということになるでしょう。残部が出た場合の繰り越しなどを考慮すると、学会事務局のほうが便利でしょうが、作成の実務でいえば、大会委員長のほうが便利かもしれません。

(5) 発表内容をかなり以前に確定させなければならない

現在は、発表直前まで変更することが可能ですが、それは不可能になります。しかし、いずれにせよ、発表の申し込みをかなり以前にやらなければならないわけですし、その申し込みを審査して発表を認める以上、内容を変更するということでは困るわけです。したがって、発表要旨をかなり早い時期に提出してもらって差し支えないと考えます。

現在、簡易印刷が発達しており、通常、2週間あれば、100ページ・数百部の印刷は可能です。業者によれば、1週間でも可能ですし、最も急がせるならば2日で仕上がります。

(6) 大量のページ数のハンドアウトを作りたい人、大きな用紙が必要な人の不利益

全体で一つの発表要旨集を作成する以上、「規格化」しなければなりません。大きな用紙が必要な場合でも、縮小コピーしてもらうしかありません。現在は、このあたりの複写技術・印刷技術が発達してきていますから、あまり問題にならないでしょう。たくさんのページ数をとりたい人の場合は、「規格化」の観点から、ページ数を制限するか、それを超過する分についての実費を発表者から徴収することになるでしょう。

さて、ここで発表要旨集を作成する場合に留意すべき事項についていくつかメモしておきたいと思います。

- (1) どのようなものを作成するかについてですが、現在の多くの発表者に見られるような「地図・単語集・例文集……」を主体としたものでは不十分です。遅刻者や、不参加者にも発表内容が理解できるよう、内容として「論述」を含むものにしなければなりません。これは発表者に事前に徹底することで十分可能です。
- (2) ワードプロで作成することを中心に考え、ページの大きさとページ数だけを指定するようにすべきです。その中をどう使っても、それは発表者の判断に任せたいほうがいいでしょう。
- (3) とりあえずの体裁としては、できあがり B5判、一人当り 6～8 ページ程度、全体で 100 ページ程度を考えます。締切日に間に合わなかった人の分は、1 ページにタイトルと発表者の氏名を書くだけとします。
- (4) できれば、大会の期日以前に入手できるように、事前販売を考えていただきたいところです。ある場合は、事前に下調べをして大会に参加し、発表者と十分な討論を行なうことができる場合もあるかと思えます。

関連する他学会でも発表要旨集を作成し、事前に販売している例が多いと思います。言語学会でやれないはずはありません。（作成の実務に携わる方は大変だと思いますが、……）日本女子大学で行なわれた言語学会のときの「社会言語学シンポジウム」では、（研究発表全体ではありませんでしたが）発表要旨集を作成したという前例もあります。

多くの委員の方々や一般会員の方々と意見交換をすると、言語学会の現在のシステムは批判のほうが多いように思います。今までの50年をふりかえることよりも、これからの50年をどうするべきかのほうが重要ではないでしょうか。発表要旨集を作成することによって、さらに言語学会の大会が充実したものになることを切に願っております。

よろしく御検討くださいますよう、お願いいたします。

草々

第101回大会

期 日 平成2年10月13日(土)・14日(日)

会 場 国立民族学博物館

第1日(10月13日)

開会の辞 午後1時より

公開講演

形態統語論における人間の位置

クロード・アジェージュ(コレージュ・ド・フランス)

Place de l'human dans la morphosyntaxe

Claude HAGÈGE (Collège de France)

シンポジウム

《言語と文化のタイポロジー》

オーガナイザー・司会 崎 山 理

ウラル諸語を中心とした北ユーラシア諸語の類型地

理論的考察の試み

庄 司 博 史

言語類型の変化：中米諸言語の類型と文化

八 杉 佳 穂

民俗分類の体系と語構成のメカニズム

松 井 健

会員懇親会 午後5時30分～7時

第2日(10月14日)

研究発表 午前10時～12時20分

・A会場

(A 1) 10:00～ Substitution and Empathy

—— Basic Forms ——

北 爪 佐 知 子

(A 2) 10:30～ 英語の寄生的空所構文の容認度について

時 本 真 吾

(A 3) 11:20～ 日英語の多重 Wh 疑問文について

高 見 健 一

(A 4) 11:50～ On the So-Called Relative Clauses in

Japanese : Against LF Pied Piping

三原健一

◦ B会場

- (B 1) 10:00~ 日本語の「うえ」について 田頭良子
 (B 2) 10:30~ 日本語動詞のアスペクトについて
 ——「た」形に焦点を当てて—— 梶原秀夫
 (B 3) 11:20~ 数量表現の連体用法と連用用法 長谷川重和
 (B 4) 11:50~ 「が」・「は」選択の可変性 (variability) と
 系統性 (systematicity) 長友和彦

◦ 会場

- (C 1) 10:00~ 琉球語の比較言語学的試論——カラジ〈頭髮〉考——
 橋尾直和
 (C 2) 10:30~ 満州語における母音の弱化と同化について
 山崎雅人
 (C 3) 11:20~ Lexicalization patterns and causative verbs
 in Shihalese ディリープ・チャンドラール
 (C 4) 11:50~ フィンランド語の分格「主語」について
 岸田泰浩

研究発表 午後1時30分～午後3時50分

◦ A会場

- (A 5) 1:30~ EVER のライセンスについて 吉村あき子
 (A 6) 2:00~ zero pronominal について 衣笠忠司
 (A 7) 2:50~ 日本語のゼロ代名詞 杉浦滋子
 (A 8) 3:20~ 日本語には「主語」はない, しかし
 日本語は, 「階層的言語」である 立石浩一

◦ B会場

- (B 5) 1:30~ 「格標識の脱落」と日本語の方言にみられる
 「語末母音の長音化」 福安勝則
 (B 6) 2:00~ 「は」の省略 甲斐ますみ

(B 7) 2:50~ 日本語の条件表現をめぐって
——叙述の特定性という概念—— 有 田 節 子

(B 8) 3:20~ Indirect Threats ——脅迫の語用論——
山 中 信 彦

◦ C会場

(C 5) 1:30~ そもそも他動詞が存在する理由——RRG・非生成
文法・文法語彙並行習得論の立場 田 原 薫

(C 6) 2:00~ 神経回路網モデルによる日本語接頭辞
「お」、「ご」の用法の学習と分析 小 田 弘 美

(C 7) 2:50~ 日本語と韓国語の敬語用法に見られる男女差
荻 野 綱 男
金 東 俊
梅 田 博 之
羅 聖 淑
盧 顕 松

(C 8) 3:20~ 「謝罪」行為の遂行とその社会的相関性について
——日中比較社会語用論的視点から——
彭 国 躍

閉会の辞

◇ 受贈図書リスト（平成2年7月1日～11月30日）

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 英米文学と言語（ビビュロス研究会編） | （ホメロス社 1990） |
| 音声科学研究 XXIII | （京都大学音声科学総合研究部会 1989） |
| 音声学会会報 第194号 | （日本音声学会 1990） |
| 近代英語研究 第6号 | （近代英語協会 1989） |
| 計量国語学 17巻6号 | （計量国語学会 1990） |
| 研究報告集 11 | （国立国語研究所 1990） |
| 言語学研究 第8号 | （京都大学言語学研究会 1989） |
| 国語学 161, 162 | （国語学会 1990） |

- 国語学研究 29 (東北大学文学部『国語学研究』刊行会 1989)
- 史苑 第50巻 第1号, 2号 (立教大学史学会 1990)
- 宗教研究 284 第64巻第1輯, 285 第64巻 第2輯
(日本宗教学会 1990)
- 人文・社会科学論集 第5号, 6号 (聖泉人文・社会学会 1989~90)
- 調査報告集 11 (国立民族学博物館情報管理施設 1990)
- 朝鮮学報 第百三十五輯, 百三十六輯 (朝鮮学会 1990)
- 通信 第69号 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1990)
- 展示会ガイド Vol. 20 (コンベンション・フォーラム 1990)
- 東海大学紀要: 留学生教育センター 第10号 (東海大学 1990)
- 東京外国語大学論集 第40号 (東京外国語大学 1990)
- 東京大学言語学論集 '89 (東京大学文学部言語学研究室 1990)
- 東方学 第八十輯 (東方学会 1990)
- 東方学会報 No. 58 (東方学会 1990)
- 東洋音楽研究 第55号 (東洋音楽学会 1990)
- 東洋学文献類目 1987年度
(京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター 1990)
- 独協大学外国語教育研究 第9号 (独協大学外国語教育研究所 1990)
- 日本学術会議月報 第31巻7月~10月号 (日本学術会議広報委員会 1990)
- 日本民俗学 180-1989, 181-1990 (日本民俗学会 1989~90)
- 函館英文学 XXIX (函館英語英文学会 1990)
- みんぱく 7月~11月号 (国立民族学博物館 1990)
- 山口大学独仏文学 第12号 (山口大学独仏文学研究会 1990)
- 山口女子大学研究報告 自然科学 第2部 第15号 (山口女子大学 1989)
- 山口女子大学研究報告 人文・社会科学 第1部 第15号
(山口女子大学 1989)
- 立命館言語文化研究 2巻2号 (立命館大学国際言語文化研究所 1990)
- 琉球竹富島の方言 (国学院大学日本文化研究所 1990)
- 論集 46 (神戸大学教養部 1990)

- Acta Asiatica 59 (東方学会 1990)
- ArOr Vol. 58 1, 2 (Academia Praha 1990)
- Bulletin No. 128 (The Linguistic Society of America 1990)
- Celtic Language, Celtic Culture: A Festschrift for Eric
P. Hamp (A. T. E. Matonis & Daniel F. Melia)
(Ford & Bailie Publishers 1990)
- Language Vol. 66 No. 2, 3 (The Linguistic Society of America 1990)
- Lexicon No. 19 (岩崎研究会 1990)
- Naše Řec 3, 4
(Academia nakladatelství Československé akademie věd 1990)
- Русский Язык в Школе 1 (Просвещение 1990)
- Slovo a Slovesnost LI 2, 3
(Československá Akademie Oriental Institute Čsav 1990)
- The Uses of Linguistics Vol. 583
(The New York Academy of Sciences 1990)
- Utterance Particles in Cantonese Conversation (Kang Kwong
Luke) (John Benjamins Publishing Company 1990)

- ◇ 本学会委員平山輝男氏は平成2年11月3日文化功労者として表彰されました。本学会として、心からお祝い申し上げます。



- ◇ 本誌は、文部省平成2年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を得て刊行されたものである。